

五年に余る強制抑留の生活を終わり、無事日本に帰ることができ、幾多の苦難はあったが、幸いに健康に恵まれ、大きな事故にも遭わず、今日平穩に日を送ることのできるのを心より感謝している。

シベリア強制労働抑留記

長野県 澤 上 定 男

明治四十一年十月五日出生。長野県上伊那郡高遠町西高遠町に生まれ、高遠町尋常小学校六年修業。家族は妻との二人。子供三人は全部独立生計を営む。

高遠町分町当時、国策の満州開拓団先遣隊長として、昭和十六年十月渡満し、満州成吉思汗地区に入植する。終戦時は団員、家族二百九十五人であった。

昭和二十年五月、現地召集を受けハイラル部隊に入隊する。入隊後間もなくソ連との交戦となり、参戦する。興安嶺地区にて陣地構築輜重兵。

装備は小銃三人に一丁、銃剣のサヤは竹であった。

開拓団では、若者は次々と召集され、団は老人、婦女子のみとなる。私の軍籍は補充兵です。開拓団の責任者であり、召集はないものと思っていた。開拓団員は戦争は勝つことのみを信じ、ただただ国のため食糧の増産に励んだものであった。

戦闘状況は、日本にはない大型の戦車で、これが何十台とも思われる大戦車隊である。車上には多くの兵隊が、日本にはないと思われる自動小銃を装備し、車上からところかまわず発射し、日本軍は湿地の中に逃げ込み身を守ったが、ソ連の乗馬隊はこの湿地の中まで入り込み、日本兵の姿は見えないと思われるのに自動小銃を乱射し入ってくるので、姿の見えないように湿地の中の溝の中に腹ばいになって、身を守ったが、何人かの兵隊は死んだと思われる。

ソ軍部隊の通り過ぎたところを見計らい道路に這い出て、あてもない地に向かって進んだ。

終戦の詔勅は、八月二十五日ウヌールで、特別の報告があると上官からの命令伝達があり、何事かと思つたら終戦の詔勅であった。満州開拓民であり、勝つこ

とのみを信じてきた者として、この詔勅を聞き、地に泣き伏した。

武装解除を上司より知らされ、ソ軍に背くことなく無条件でこれに従えとの命令であった。命より大切とされた小銃も乱雑に山積みされ、ただただ涙であった。うず高く積まれた兵器、破甲爆雷。この破甲爆雷は、ソ軍の戦車に対する決死隊班によって、一個六キロの爆薬を入れた箱を自分の胸に抱き、ソ軍の戦車目掛けて飛び込み自分も死ぬという、文字通りの決死隊である。このとき、自分は兵器係の助手であり、この決死隊員に一個ずつ渡すときの気持ち。この兵隊もこれで死ぬのかと思つたとき、戦争の悲惨さに涙して渡したものであった。終戦によつてこれらの爆雷兵器が山積みされている場所に、大砲を挽いて来た馬が急に走り出し、大砲を挽いたまま飛んで来てこの破甲爆雷が次々と破裂して人も馬も次々飛ばされた。高い電柱に飛ばされたり、私の所にも何か大きな物が飛んで来たと思つたら、馬の腹わただった。この時こそ世の終わりと思つたものです。この場所が博克凶。

軍から開放された後の行動。これについては、この部隊はソ軍に対し強く抵抗した部隊ということで、種々と流言が盛んに飛んで、ソ連に連行されて死刑になると、皆戦々恐々の気持ちであった。鉄道がどんどんと改修されて、シベリア鉄道は広いレールに取り換えられているように思われる。満州里方面に行く汽車に日本軍がたくさん乗せられて行つたとの話もある。

八月二十三日には自分らの部隊も帰国ということであったが、防寒手袋、防寒衣服などが各人に配付された。日本へ帰すというのになぜ防寒服が渡されるのか。脱走する兵隊もありましたが、ソ軍の銃撃によつて皆射殺されている。

私どもは幸い輜重兵であったので幾分の食糧はあり、飢えをしのぐことはできた。ソ連の配給は黒パンにスーブぐらいのものであった。

東京ダモイと騙されて、二段になった貨物車に乗せられ、満州里からソ連に入る。日本に帰すなら満州鉄道で行く方が早くてよくはないかと話すと、満州人が決起して日本人を殺すと言っているからシベリアから

黒龍江沿いに行くとのことであつた。満州里から一步ソ連に入ると同時に、線路の両側に、満州から運んできたたくさんのお資がある。一般家庭の家財道具と思われる物、その他生活物資など、行けども行けども、よくもこのような物を運んだものとしたただ驚くばかりである。なお驚いたことは、終戦と同時に満州の家に軒並み青天白日旗（中国国民党旗）が立てられたことだ。われわれ開拓民がこのような光景を見るとは何たることよ、日本が勝つことのみを信じたものをと、
またも泣けた。

満州里を出発して今日で五日にもなる。やがてチタに着く。依然として汽車は夕日に向かって進み、朝日は後方に見える。チタからウラジオストックの方に行く線もあるとだれかが言っている。車外を見れば猛烈な雨である。たくさんのお資が光っている。初めて見る大きな駅、最後の望みをかけたチタであつた。

二時間ほどの停車で発車した。真夜中であるが汽車は方向を変えた様子はない。モスクワ行きか、銃殺か、汽車の旅は続き、皆、元気はない。さながら死人のご

とくだ。だれかが大きな声で「海が見えた」と怒鳴る。死人？が一斉に頭を上げる。「それ見ろ、やっぱりウラジオストックに来たではないか」と、大変な騒ぎ。

自分も貨車の壁から外を見た。この貨車の壁も、ナイフで長時間かけて隙間を作ったもので外を見ることができた。なるほど大きな海だと思つたが、海に出るわけがない。これは黒龍江では？間もなく停車した。用便に行く者、それぞれ大騒ぎで下車した。ソ連人をつかまえて手真似でここは何と言うところか聞いたが、要領は得られぬ。汽車の前方を指してウラジオストックか、後ろの方を指してモスクワかと聞いたら、それは全く反対で、汽車の進む方はモスクワ、後方はウラジオストックである。この海はと聞けばザバイカルと言う。ザバイカルとは何か特別のソ連語かと思つたら、兵隊の中に少しソ連語を話せる者がいて、これはバイカル湖だと言う。ウラジオストックの海だと思ひ、また黒龍江だと思つていた我々にバイカル湖とは。地図はなくとも、このバイカル湖がシベリアのどの辺にあるかは想像がつく。後部車両から同志のM君が青い顔

をして出て来た。何事も運命だ、元氣を出せと力づけた。自分も泣けて仕方がない。

汽車は依然として西へ西へと進んでいる。クラスノヤルスクに停車した。この駅はシベリア本線の中にある大きな駅だと記憶している。ウラル山脈の手前だと思う。遠くまで来たものと今更ながら驚くばかり、今日は九月三日である。満州を出てから十二日目である。相当長い時間の停車で、貨車から降りて幾分町の様子を見ることができた。大きな鉄橋が見える。兵舎らしき建物が小高いところに並んでいる。満州の町とは全然異なつた家造りである。

ヨーロッパ戦線から持ってきたか、それとも満州から持ってきたものか、大きな機械類が延々と積まれている。数時間の停車でまた汽車は走る。もうこの汽車がどこへ行こうと論ずる気力もない。前部車両からの伝令で、この汽車はもう少して浴場のある町に着くから、そこで入浴してゆつくり休んで、それからウラジオストツクに行くと言う。この奥地まで来てウラジオストツクかと、だれ一人信ずる者はない。後で感じた

ことだが、ソ連人は実によく嘘を言うというので有名であつた。汽車は依然として驍進を続けている。突然線路が単線になつている。なるほど、クラスノヤルスクまでは複線であつたが、今は単線になつている。山間の小さい駅に着いた。今までの広野とは違い、まるで視野の狭い所で日本内地を思わせる風景である。駅には石炭を積んだ貨車が無数にある。駅にはソ連人が大勢いて、「ヤポンスキー・ウーグリーグルチ・ダー、ダー」と口走る。何のこともだかさっぱり分からない。(後で分かつたが、日本人石炭掘りだ)どの駅に着いても石炭の貨車ばかりである。これで石炭掘りの作業ということが明確になつた気がした。

衛生面には神経過敏か、医師もおり定期的に検査があり、体の弱い者は「オーカー」ということで炭鉱作業でなく地上作業に回されたものであつた。シラミはよくわいた。このシラミ退治は薬ではなく、ペーチカの上で衣類を二人で広げると、シラミがペーチカの熱によつて下にばらばらと落ちて、これがまたパチパチと音を立てて焼け死んでゆく。このようなたわいない

ことが一つの楽しみでもあった。入浴はシャワー式であり、作業して帰るときには必ずこのシャワーで炭鉱のほこりを落として収容所に帰ったものであった。

十四号炭鉱には日本人は百八十人くらいおり、これが大体各番方六十人くらいが作業に入ったものである。自分はこの責任者であり、炭鉱に着くとまず炭鉱長の室に行き人員の報告をする。私はこのソ連にいつまで抑留されるのかわからないが、昔から郷に入ったら郷に従えという言葉がある。ソ連人とも仲良くして楽しく暮らして行くことが生きる道と思い、毎日の炭鉱長とのあいさつも、その日の就労人員の報告をするときも、きわめて気楽にやった。この炭鉱長の名は「ジュネフ」という名であったが、体格は大きく色白の顔でユダヤ人と思われる人である。私は炭鉱長の室のドアをあけると、「ドラスチイ（あいさつ）」と同時に「白豚」という声をかけると、炭鉱長も同時に「サバカミ（白豚）」とあいさつをする。この白豚という意味もわからないのあいさつであるが、これが相手に好感を持たれたか、どの番方にも必ず一度は坑道に作業の現況

を見るために来る。特別光の強いライトで来るので炭鉱長が来たと気がつくので、私が一生懸命にスコップでコンベアに石炭を入れていると、「サバカミ」と名を呼んで入ってくる。私の姿を見ると「サジース、腰をおろして休め、ガバリーをしろ」。このガバリーという言葉は、私に作業をせずに兵隊に一生懸命ノルマを上げるよう世話をやくようにとのことであり、このときに炭鉱長に「ノルマを上げるから、この際ぜひ食べる物を増食として出してくれ」と話したところ、「よし、帰るときに必ず増食として出すから」と言い、これが実現し、兵隊も大変に喜び一生懸命働いたものであります。

収容所から十四号炭鉱まで徒歩で約二十分くらいかかったが、その間前後に監視兵がつき、この途中でソ連の将校に必ず行き会う。この炭鉱に来てまだ日は浅いが、共産主義にならなければ日本へは帰れないことを心から強く感じるようになり、これは共産主義になったことを動作から見せなければならぬと思い、この炭鉱までの往復をインターナショナル革命歌を歌う

ことにしたもので、行き会うソ連将校もこの歌に対して停止敬礼をしてくれ、「ヤポンスキー・オーチンハラショー」と声をかけてくれるようになりました。

収容所の内部では、依然として日本軍の将校は肩章をつけて食べ物も特別食で上げ膳据え膳であり、今や日本軍は壊滅していると思われるのに、これでは民主主義の障害になると気付き、私は炭鉱長に対し、将校連中を別のラーゲルに連れて行くことを申し入れた。

これに対し数日後夜中に全員集合がかけられ、何事かと集合したところ、今から将校連中は全部他のラーゲルに連れて行くから、これからは皆は一般人として民主主義に徹して働くようにとのことで、私はこのときから、このラーゲルの事実上の長となつたものである。隊員一同にも、無事に日本に帰るためには、炭鉱長の言われるようにノルマを上げること、そうすれば食事も今より量も多くなる。また、三度の食事も増食として配給してもらうことも炭鉱長に交渉し、その結果、十四号炭鉱は成績も良く、炭鉱の穴の中ではレーニンやスターリンの話もソ連人と話したものである。だが、

穴の中にはゲーペーウ（秘密警察員）がいるからと注意深く話したものであった。隊員も力を合わせてノルマを上げること而努力し、毎日の増食も食べきれずに収容所に持ち帰り、オーカー（病弱者）の兵隊に分配できるようにもなった。

ある日、澤上は元開拓団員だからペーチカの修理ができるだろうから、炭鉱幹部の家のペーチカを見てくれとのことであった。私も驚いたが、これもソ連人と仲良くする一つの仕事と思い、これを承諾して監視兵に連れられて町に出た。

私がソ連の町に出て一番に驚いたことは、共産主義はすべて平等だと思つたが、町を歩いて見たら、首にずだ袋に下げて「フレバダイチ」と大きな声で家の前に立っている人を見た。「フレバダイチ」という言葉はパンをくれということであり、働かざる者は食うべからずということであるが、最低の三百グラムの黒パンを与えているが、このパンだけでは生きて行くことのできない量であり、したがって乞食が多くいるのだということに気がつき驚いた。それでは一般家庭でこ

の多くの乞食にくれる家庭があるのかと思つたが、これがまた驚きであつた。何かの職についていて、炭鉱で上役の、日本式に言うと同長とか部長又は支配人、炭鉱長と言われる階級の人は、パンは全部白パンであり、作業が終わつて帰るときには白パン一本あるいは七分とか半分、又は三分の一、これを袋に入れるのではなく、脇に抱えて、おれは今日は働きが良く、これだけのパンをもらったぞと誇らしげに帰るのであつた。

このような姿を見て、上級の家庭では食べきれない白パンのかたい外側を乞食に与えるものであることも、ペーチカの修理に行つて知ることができたのであつた。口では平等と言われていても、この食物一つを見ても、何と不平等であるかを感じた。

炭鉱の作業は相変わらずであるが、増食となつたので、皆元気でやつている。この炭鉱の採炭技術というのは極めて幼稚なものということは、兵隊の中に九州の出身で日本の炭鉱で働いたという人がよく話をしていた。

この十四号のある「チャイナゴールスカ」の地形は

三方に遠く山がある馬蹄形の地区で、平のところ全部炭鉱で一号から十四号までである。地表は三、四メートルで下は全部石炭脈の場所、日本なら当然露天掘りをするところだと九州の兵隊は常に話していた。思えば、地上作業班にいて水道工事をするとき、厳寒の地ということ、四メートルも深く掘鑿したが、浅い所は二メートルくらいで石炭が出たことがある。したがつて、毎日掘り進む坑道は上部天井も下部も全部石炭層のため落盤が大小にかかわらず発生し、その都度負傷者、死者が出た。私も坑道の採炭場の杭木建ての作業をしたが、天井の落盤防止にはアギネ板を使用する場合、その配置をした。杭木柱が足りないときにはエレベーターにて地上に出て、杭木柱を坑道に入れる作業もした。杭木材は長さ十三尺に厚さ六寸くらいのもので、その材質はエゾマツ、カラマツ材である。寒冷地の物だけに一本の重さも大変なものであり、この杭木おろしの作業は大変な重労働であつた。

ある夜、ちょうど満月を思わせる月夜に思わずこの月を眺めて、この月は満州の空も照らしているだろう、

満州の開拓団員は、また家族の者はどうしているだろうか、この月が鏡であったならと、思わず涙で泣けて仕方がなかった。今日は八月十六日である。お盆である。いろいろのことが走馬灯のごとく思い出される。これは日本に帰って知ったのであるが、あの炭鉱の杭木作業で月を眺め、満州の者はと思ったその日が、最愛の妻がこの世を去った日であった。

坑内の準備作業班の仕事をや約三カ月間担当したが、最近体の調子の悪いことに気づき、医務室に行き医師の診断を受けた。その結果、肋膜炎とのことにて、坑内作業から地上作業の方に回されたために坑内作業に行かずにいたところ、炭鉱主任から、澤上が地上作業に従事しておつて、採炭現場に従事しないなら日本兵は使わないと同僚の兵隊に話していたとのことで、同僚の兵隊も、是非採炭現場に行ってくれ、せつかくおかげで増食も出たりして皆嬉しく働いているのだと同僚の言葉を聞き、俺はやっぱり炭坑で死ぬかと心に決め、医師と相談したら、大変に良くなっているが、採炭現場に行くなら準備方の杭木建ては胸を圧迫する

からと、医師から炭鉱長にも話してくれ、専ら石炭をコンベアに流す作業となった。このときが昭和二十二年三月であった。郷土高遠公園の桜も咲き始める時季となるだろう。望郷の念ひとしおである。

このころ、炭坑の中で働くソ連人が日本兵と所持品の交換をするようになり、彼らが盛んに日本ダモイということを話すようになり、あるとき、炭坑長に「サバカミ、ソ連マダムと一緒にたつてロシアで暮らさないか」と再三言われたが、その気には絶対なれなかった。ある日夜中に突然「全員集合」の伝令にて広場に集合した。このとき、正式に日本ダモイを告げられたが、まだ安心はできなかった。そのまま炭坑から駅に向かう。駅には貨物車が一ぱいである。乗車の合図で皆貨車の前に並ぶ。見れば貨車は急造の二階になっており、皆それに乗り込み、やがて発車した。

貨物車は西でなく、朝日に向かって進む。発車して四、五時間を過ぎたころ大きな駅に停車した。駅には大勢の日本人が働いている。そして「日本兵がダモイだ？君たちは今まで働いていてソ連人の嘘こきにさん

ざん騙されたことを忘れたか、いまだに満州にいた日本人がソ連に送り込まれているぞ、俺たちも日本ダモイと言われてきたものだ、それがこのような所で働いているのだ。君たちもこれから沿海州あたりの伐採班仕事をする事になるぞ」と言われた。何日か汽車に乗って、途中停車して、貨車に積み込まれている大釜を降ろしてはコーリヤンなどの雑穀のおかゆのような食事が配給された。

鉄道線路はいつの間にか複線から単線となっていたのに驚いた。チャイナゴールスカを出発して十何日かが過ぎていた。ある夜、突然、ここで全員下車との伝令にて一同下車した。平地ではあるが林の中で建物も何もなく、今夜はここで休めということである。これは途中で日本兵の話された伐採作業かと、この林の中で皆肩を寄せ合って仮眠をしたが、遠くの方に確かに波の音がする。これは海端に近いと皆が口々に話す。夜が明けた。行軍をするとのことである。前方に確かに海が見える町である。ウラジオストクだと思つたらナホトカと言う港だった。

収容所に入つてみて驚いた。帰国する兵隊が二万人も集結して、第一、第二、第三分所に分けられて入つているとのこと。ここは共産教育最後の仕上げであり、我々は皆試験台に乗せられて、まだ民主化が徹底してないとすればまた作業隊に入れられて、懐かしい日本海に通じるこの海を見ながら奥地に転送されるのである。各宿舎とも赤旗の林立にて、朝から晩まで「インターナショナル」「赤旗革命歌」の合唱である。毎日作業はなく、「新日本建設青年同盟」という腕章を付けた日本人による共産主義の講義攻めである。

第一分所は無事十日目で第二分所に移された。ここは前にも増して激しい共産教育である。食糧は、ソ連での最後の印象を良くするためか非常に豊富で質もよいが、この第二分所ではソ連人より同じ日本人である青年同盟の者が恐ろしい。これらの連中ににらまれたら最後、帰国は絶対にできないと思わなければならぬ。自主的に共産主義の勉強もしなければならぬ。第二分所にある図書室には、スターリン伝、コルホーズ農業、マルクス伝などの本があり、私は隊員一同に、

この図書館の本を全部自分たち仲間借りてきて熱心に研究しているようにして彼らの点数を稼いだ。

また、演芸を通じての共産教育も毎日である。また、反動分子の吊るし上げが毎日続けられる。泣いて反動でないとは弁明しているが、大衆が聞き入れなければどうすることもできない。収容所において将校だと言って兵隊を泣かした連中が皆、やり玉に上がっている。気の毒だが仕方がない。

第二分所も無事通過して、いよいよ最後の第三分所である。ここでは帰国の船を待つばかりである、自分たちも第一一三中隊として編制され、第十七梯団として帰国することになった。梯団長、副梯団長、補導長の三人の幹部ができた。自分は補導長として専ら共産運動の指導に当たらなければならなかった。文字通り最後の仕上げに懸命である。せつかくここまでこぎつけた帰国を目の前にして失敗があつてはならない。共に苦勞をしてきた同志である。一人も残すことなく乗船させたい。ソ連から指示された事項については、一人の違反者があつてもならない。それがために全部の

帰国が駄目になった例もあつたことを聞かされた。徹底的な教育、帰らんがための教育である。内地に無事に上陸したならば、「赤よ、さらば」である。甚だもつて頼りない共産主義者である。

ナホトカ教育四十余日、いよいよ待望の帰国である。収容所の広場には初めて復員式の会場が用意された。赤一色、会場は帰国の喜びに湧き立っている兵隊でいっぱいである。補導長として決議文をソ連側に渡さなければならぬ。急の申し入れであつたが、何でも彼らの喜びそうなことを決議すればよい。左記の決議文を高台の上に入り朗読して、「スターリン万歳」で式を閉じた。

決議

吾等は復員に当たり左記の決意を固めソ連側の御厚意に応へむとす。

一、吾等は誓つて勤勞大衆の前衛たらむ。

一、吾等は絶対人民政府樹立を期せむ。

一、吾等はあくまで戦犯者を追及せむ。

一、吾等は断固、天皇制魔術に躍る資本主義陣営と闘

はむ。

以上の決議文にソ側の高級將校連も非常に満足の様子で「オーチンハラショー（非常に良い）」の連発であり、握手をする者、肩を組んで喜び合う者、それだけに彼らは我々第一一三中隊の復員に期待をかけたものであった。港に向かつて行進である。いるいる。沖に日本の船が、懐かしい日の丸が。何とも言いしれない。涙が出て仕方がない。日の丸もぼやけて見える。

乗船である。タラップを踏む足が気持ちよく響く。

さらば大陸よ、永久にお別れだ。この水が日本海であり、懐かしい日本の岸を打っているのかと思えば、手にすくってみたい気持ちである。ナホトカの港はまだ未完成であり、日本兵が腰縄をつけて断崖の大きな岩に挑んで働いている姿が見える。君らも一日も早く無事帰ってくれよ。日本に親も兄弟もいるだろう。乗船して船の人となる。もう大丈夫だ、赤は今ここでさらりと捨てよ。我らはやつぱり日本人だ、新日本の建設は共産主義ではできないぞ！我々は帰らんがための共産主義であつたのだ。

私は船の中の全員に上甲板に集合するようにした。

船倉から真つ先に看護婦が白衣で何か手に持って上がってきた。幾年ぶりかで見える日本の婦人である。ああ懐かしいなあ、日本にも女がいるのか。ハバロフスク発行の日本新聞の報道には、内地には女はいない、いても年寄りくらいのもので、アメリカの兵隊に殺害されたとか、食料不足で餓死する者一日に数百名とか、真実のごとく報道されていただけに、この姿は本当に嬉しかった。看護婦が、「皆さん、胸を開いてください、今からシラミ退治の薬を体に入れるから」と。このとき初めてDDTという薬を知ったものであった。

全員集合したので補導長として訓示をした。「皆さん、長い年月ソ連にて死と闘いながらの作業で、生きんがための苦勞をされた同志であり、各收容所にての共産思想の強要に対し、これに反抗することもできず、皆、共産主義者になつたものであります。我々一同は、敗戦によつて乱れたる日本国を再建していくには、共産主義の思想では日本国の再建はできません。私ら同志一同は、帰らんがため共産主義に賛同したのであり、

今このナホトカの海の見えている内に共産主義を捨ててくれ」と強く力説したものでありました。一人の反対もなく静かに聞いてくれました。引揚船にへんぼんと翻る日の丸に向かって、全員で「君が代」を斉唱したものでした。皆、涙を流し泣いている。ソ連将校も広場で手を振って見送ってくれている。船内は日本に帰れる喜びでいっぱいだった。

昭和二十二年五月十七日、明日は懐かしの舞鶴に着くのだ。船のエンジンの音も爽やかに耳に聞こえる。日本の海だ、日本の陸が見える。舞鶴だ、上陸だ。引揚援護局の温かい出迎えにより上陸だ。この一歩を踏まんがために、あらゆる苦勞、困難も忍んでやってきたのです。道の小石までが我々を迎えてくれるように見えた。自分は今日日本に帰ったが、満州に残した開拓団の同志は……、思わず一句が浮かぶ。

「開拓の同志の者よ 無事なるか

我一人今 日本に帰る」

「我が妻子 無事に帰りしか 気はしずむ

あの夢まくら 如何でありしか」

どなたが作りしか、同じ思いの人の一句が壁に掲げである。ああ、同じ思いの人の作詞よ。

「幾千の人立帰る 吾子よ影

見るよしもなく 泣きぬれて立つ」

久しぶりに味わう青だたみ、思い切り長くなって寝てみたい気持ちだ。自分は今、日本の土を踏んだが、はたして満州の家族は無事に帰っているだろうか、いつときも早く上陸を知らせよう。電報受付所に駆けつけたが金は一銭もない。料金は先払いでよいとのことである。留守宅にあて出すのであるが、妻が無事であるとはどうしても思えない。両親にあてて出した。この電報を見たら、家の者は果たして喜んでくれるだろうか。妻が無事に帰っていないとすれば、この電報を受け取った親は別の意味でまた泣くだろう。何とも言えない複雑な気持ちであった。

身体検査、予防注射を受け、支給される一切の物も、皆受け取って、いつでも故郷に帰れる準備ができた。

一時手当として、金三百円が渡された。今の自分にはこの金が全財産である。思えば八年前、国の要請によ

り開拓民として、国策の大理想の美名のもとに一切を犠牲にして、自分一人のみならず、妻子、親類、知人の者を多数引き連れて渡満した自分ではないか。ああ、何という変わり果てた姿であろう。身に着けているものは炭鉱の石炭じみた作業衣一つである。補導長であった関係か、特にMP及び京都警察の調査があり、種々と質問されたが、共產主義は乗船と同時にナホトカの海へ捨ててきた自分だ。彼らが心配するような行動は絶対がない。舞鶴市民の熱烈なる見送りで出発した。沿道各駅の温かい送迎にただただ涙である。

名古屋駅に着いたが、あの有名な名古屋城はない、よくもやられてしまったものである。あの立派であったこの駅も、何と乱雑極まるものだろう。敗戦ともなればこのようにも理性を失うものであろうか。日中、大道で賭博もやっている。子供が煙草を吸っている。あまりの変わり方にただただ驚くばかり。汽車の窓ガラスは一枚もなく破れて、みな、板戸になっている。汽車は刻一刻と郷里高遠町に近づく。私の気持ちは相変わらず複雑である。辰野駅に着いた。だれか迎えに

出てきているだろうか、あまりにもみずばらしいこの姿にまたため息である。迎えてくれたのは満州開拓と一緒に رفتっておった弟であった。お懐かしい弟よ、よく元気で帰ってくれたなあ！弟は何も言えずただ泣くばかりだった。

辰野町引揚接待所に入ってお茶の接待を受け、弟から郷里の様子、まず団員は皆帰ったであろうか。思いのほか多数の者が死亡されているのに驚くばかりであった。ああ、何と言って申し訳をしたらよいだろう。

私はなぜシベリアで死ななかつた。弟は長男和正が元気でいるとしか言わない。正に的中であった。妻は死んだのだ。許してくれ、団員の方々よ、妻よ、子よ。

高遠町入口の鉾持棧道にて、仙丈の山も五郎山も月蔵山も三峯川の流れも昔のままである。「国破れて山河あり」変わらぬものは自然だけである。温かい両親の慰めに日一日と心は冷静になってゆく。戦死者及び開拓殉難者の慰霊祭が高遠町主催によって行われ、弔辞を捧げて幾分気持ち楽になった。

弔辞

維時昭和二十二年九月二十一日、天高く澄み風なきたる本日を下して高遠町民各位の主催の下に遺族会の発会式を挙行せられ、併せて戦没者並びに北満の広野に歟を振るいつつ在りし開拓団員の亡きみ霊に對し盛大なる慰霊祭を挙行さるるに当たり、不肖澤上は今は亡き同胞諸氏を偲ばんとす。

それ過去を顧みれば、昭和十六年時の日本の国情を^{つらつらおもはばか}熟慮^{じゆりゆ}に食糧増産の急務なるを知り、満州開拓三峯郷送出の議起るや、理想を同じゆうする諸氏は率先して第一次、第二次先遣隊員として或いは本隊員として国策の大理想に敢然参加し、捨てがたき郷里を捨て、別れがたき一族の者と袂を分かちて、洋々たる蒼海を渡り芒々たる大陸の広野を過ぎて北満の野に至り、歟を振ること四星霜。その間、冬は風荒く皮膚を裂き、夏は炎熱厳しく身をこがし、千辛万苦を諸氏と共に努力奮闘、協力一致して、入植日尚浅きに、早くも一戸十四トンの五穀を供出せり。全満州開拓団中、未だかつてその比類なきと賞せられ、表彰を受け、団員一同歡喜勇躍せしも、聊かの怠慢の念なく、唯一筋に国に

報いんと一層開拓にいそしみ、若き者は戦線防備に、老いし者は増産に、一死祖国の為に苦闘を続けしに、噫々、未だかつて我々日本民族が夢にも思わざる戦に敗れて、一線にありし者はたおれ、或いは傷つき、現地の者は、昨日まで親しく交りし原住民に今は侮辱され、或いは家畜、財産を掠奪され、あまつさえ人命に危害を加えんとする虞ありて、第二の故郷と頼む高遠村にも安住するを得ず、僅かに家財を携えて避難すべしその安全地帯を索し求むる途すがら、匪賊と格闘せしも力及ばず、ついに金品を奪われ、飢えて食なく心身疲れて宿るに家なく、雨の日も暗き夜も大陸の泥濘に悩みながら、疲れ果てたる羊の群の如く哀れなる姿にて、ようやく齊々哈爾にたどり着きしと聞く。その間、諸氏が耐え忍びたる艱難辛苦を想像してだれか泣かざる者なし。その当時、私はシベリアの炭坑にて苦役に従いつつも諸氏の安否如何にと、又祖国日本の情況を察し思ふ身であつたが、幸いにして返還されるに至り、海山遠き万里の旅程も二カ月を費やして去る五月二十三日、辰野駅頭に到着して、同志諸氏大半は病

魔のため憐くも満州の土となられしを初めて聞きし時の悲しみは、断腸の思いにて胸迫り、両眼曇りて見え、熱涙頬につたわりて、言わんとすれども声出さず、語らんと思えど諸氏はこの世にあらず。唯、諸氏の面影が脳裏に宿りて忘れざるのみ。思うに、四年間諸氏と苦楽を共にして働きたるのみか、諸氏は異郷の地下にあり語り合う時なし。嗚呼、悲しい哉。

今更悔いて返らざるも、諸氏を引率して渡満せしめ、今この悲しみをさせし私の罪は山よりも重くして、詫びるに辞なく、唯、新日本建設のため揮身の努力を尽くして、微力ながら諸氏のご遺族と手を取り合い正しく行き抜くことを誓って、重き罪の万分の一を償う。

諸氏よ、同志よ、天地の間に迷わず、安んじて瞑目あれ。

祭壇に礼拝し一言述べて、慰霊の言葉とす。

願わくば、靈魂来りて享けよ

維時昭和二十二年九月二十一日

元満州開拓団三峯郷

基幹先遺隊長 澤上定男

この慰霊祭を終わり心機一転、意を決するところありたり。

保感の詞

『吾のみが 生きながらえて 帰りしは

同志のみ靈 あと頼むぞと』

『人生の 七分をすぎ 今の吾

生まれかわりて あら海にたつ』

帰国後の生活

昭和二十二年五月二十日、自宅に着いて以来、自宅にて体の回復のため休養を続けていたが、渡満当時の広瀬町長は病気のために退任し、その後任の黒河内義夫町長よりの話で、前町長の広瀬が今は病床にあるが私に篤と話されたことは、澤上は町のためとして満州開拓高遠村建設という大理想のもとに率先して先遺隊長として渡満し建設に努力され、当時日浅くして、全州開拓団中に例を見ない一戸十四トンの雑穀類を供出されたことよって満州政府から表彰を受けるなど、私も満州の現地まで行き祝意を表したもので、彼が無

事に帰国したなら高遠町役場に再就職できるようぜひ頼むとのことで、澤上君、体が回復したら役場に再就職してくれ、今後町のために働いてくれと黒河内町長から申され、このように町理事が思ってくれるのかと、その処遇について心から感謝し、同年七月、高遠町役場職員となった。

【執筆者の紹介】

澤上定男氏は、明治四十一年十月五日長野県上伊那郡高遠町に生まれる。地元高遠小学校を卒業。昭和十三年、高遠町農業会臨時職員として勤める。その精勤ぶりを評価され高遠町役場職員に採用され、勤務する。昭和十六年、満州開拓団送定要請があり、上伊那郡下より南部・北部・東部の各地区各一個団送団が決定。その中の一つ、天竜川の支流三峯川沿岸の高遠町を中心に一町九カ村による三峯開拓団が決定。その先遣隊長に選ばれ、各種訓練を終えた後、昭和十六年十月、満州興安総省布特哈旗、成吉思汗地区へ永和三峯郷開拓団先遣隊長として入植団の建設に邁進する。昭和二十

二年五月、現地召集によりハイラルの部隊に入隊。昭和二十年の終戦後シベリアに抑留され、二年余りの抑留後、昭和二十二年帰国。同年、高遠町役場に復職する。

昭和四十年、役場職員を退職するまでの二十数年間に、経済課長・総務課長・参事職等の要職にあつて、町の発展のため尽力する。

町役場退職後、高遠町議会議員に推され、町会議員として活躍。職員・議員を通じ、観光高遠町のシンボルとして全国に知られた高遠公園の小彼岸桜の保護保存など、各種事業に尽力する。

また旧開拓団のことも忘れず、あの悲惨な終末により帰国した団員、家族に思いを寄せ、多忙な公務の間にも旧開拓団員・家族を集め、永和会を結成し、その会長として親睦を図り、互いに励まし合い、再起に力を尽くすとともに、犠牲となった百数十名の霊を慰めるため拓魂碑を建て、毎年慰霊祭を行うなど、八十七歳の今日でも各方面に活躍している。